

2004アテネパラリンピック
競技大会

車いすテニス日本代表

おおまえ ちよこ

大前 千代子さん



プロフィール

1956年、広島県生まれ。生後1年半でポリオのため下半身マヒに。幼少のころ両親と共に大阪へ。大学卒業後、大阪市内の銀行に就職してほどなくアーチェリーを始める。そのアーチェリーで80年、オランダ・アーヘンのパラリンピックに初出場し、金メダル獲得。翌年結婚して“引退”するが、87年、車いすテニスで“復活”。96年アトランタ、00年シドニーに続き、04年アテネパラリンピックに出場を果たすなど、車いすテニス界の第一人者として活躍中。大阪車椅子テニス協会会長。



炎天下での練習風景(写真・本誌編集担当)

うまくいけばダブルスで銀メダル。 可能性はあります。

世界中を沸かせたアテネオリンピックは先月末に閉幕したが、繰り広げられた感動をそのまま引き継いで、いよいよ9月17日から、障害のあるアスリートによるスポーツイベント、パラリンピックが開催される。日本からは270人の選手・役員がアテネ入りするが、車いすテニスの日本代表選手としてメダルに挑むのが、大前千代子さんである。

大前さんが、車いすテニスを知ったのは、育児や家事に追われながらも「チャンスがあれば何かスポーツをしたい」と考えていた87年ごろ。友人に紹介された堺市内のテニスクラブで、初めて車いすテニスのプレーを見たことにはじまる。「びっくりしました。車いすを自在に操りながら、ラケットを持ってラリーしている。すごい、やりたいと思った」。

早速、車いすテニスの練習に入るのだが…。当時の大前さんは松葉杖を使用しており、車いすの経験はゼロ。テニスよりも、「まず車いすの乗り方から練習しなければならなかった(笑)」。子どもたちが寝ている早朝に道路を走り、坂を登った。コートでも「気持ちは

ボールに向かっていのに、身体が付いていけない。ある程度動けるようになって、相手ボールの動きが読めなくて…」。

だが、持ち前の粘りと根性で2年後には近畿選手権、さらに全国大会出場と着実に力をつけるのである。

初の海外遠征は、93年オーストリアの世界チームカップ(国別対抗)だった。その後の大前さんは、国内はもちろん、世界ランキングでも上位に顔を出す世界的アスリートに成長。また96年には、車いすテニスで初めてパラリンピック(アトランタ)に日本代表として出場する。パラリンピックは前回のシドニーにも参加しており、今回のアテネで3回連続の偉業となる。

生まれは広島県呉市だが、小さい頃から大阪で育った。養護学校を経て、大学では、社会福祉学科を専攻。「どれぐらい自分が社会で頑張れるか」と、松葉杖に頼りながら、キャンプリーダーにも挑戦した。その後「健常者の中で頑張っている姿を見せるのも、私なりの福祉のあり方、と、変な理由をつけて(笑)」銀行に就職する。

半年後、障害者スポーツ教室の存在を知り「何か身体を動かさないと」と、アーチェリーを始めた。このアーチェリーで急速に頭角を現わし80年、日本代表として出場したアーヘン(オランダ)のパラリンピックで金メダルを獲得するのである。翌年、結婚とともにアーチェリーを引退するのだが、それは「家事や育児を、他人任せでなく、自分でやっていたから」だという。

話を車いすテニスに戻そう。大前さんの勝負強さを、アテネにも同行する日本車いすテニス協会ヘッドコーチの愛須正さんは「肉体的には30代の柔軟な筋肉を持ち、精神的にも外国人コンプレックスがなく、並外れた集中力の持ち主」と太鼓判を押す。

アーチェリーの金メダリスト大前さんに、車いすテニスのメダルの可能性を聞くと、嬉しい答えが返ってきた。「前回のシドニーではダブルスで3位決定戦まで行ったので、可能性はあります。うまくいけば銀」と。

(文・脇本勤 / 表紙写真・高島悠介)